



芥川龍之介 著

蜘蛛の糸  
杜子春

A4用紙で印刷すると、実寸サイズをご確認いただけます。  
※倍率100%の場合

# 目次

蜘蛛の糸	5
アグニの神	15
犬と笛	41
魔術	65
仙人	87
白	97
トロツコ	119
杜子春	131
蜜柑	159
三つの宝	169

# 蜘蛛の糸

ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池はすいけのふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらつしやいました。池の中に咲いている蓮はすの花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色きんいろの蕊ずいからは、何ともいえない好い匂においが、絶間たえまなくあたりへ溢あふれて居ります。極楽は丁度朝なのでございませう。

やがて御釈迦様はその池いけのふちに御佇おたすみになって、水の面おもてを蔽おほっている蓮の葉の間から、ふと下の容ようす子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄じごくの底に当って居りますから、水晶すいしやうのような水を透き徹して、三途さんずの河や針の山の景色が、丁度覗のぞき眼鏡めがねを見るように、はつきりと見えるのでございます。するとその地獄の底に、韃陀多かんだたという男が一人、ほかの罪人と一しよに蠢うごめいている姿が、御眼に止まりました。この韃陀多という男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございませう、それでもたつた

一つ、善い事を致した覚えがございませう。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛くもが一匹、路ばたを這はって行くのが見えました。そこで韃陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗むやみにとるといふ事は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございませう。

御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この韃陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報むくいには、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠ひすいのような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになって、玉のような白蓮しらばすの間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下おろしなさいました。